

ベータ文獻と初期經典に見る地獄に関する考察* 一

地獄の種類と位置を中心に 一

李市竣**

目次

1. はじめに
 2. ベータにみる地獄
 3. 初期經典にみる地獄
 4. おわりに
-
-

1. はじめに

平安時代の初期に編纂された『日本靈異記』中7には奈良・元興寺の智光が見聞した地獄説話が語られる¹⁾。智光は獄卒によって閻魔大王のもとにつれてゆかれるのであるが、はじめは西のほうに、そしてあるところからは北に進む。地獄は水平の南北の方向にあるようである。智光は地獄の熱気の中、熱い鐵の柱、熱い銅の柱を順次に抱かされ肉はみな溶けただれたにも関わらずまた生き返って最後は阿鼻地獄で責苦を受ける。この説話からは水平的地獄観である点と熱地獄である点に注目されるが、以後、『具舍論』に基づいて地獄が深い地下にあると説く『往生要集』が社會に多大な影響を及ぼしていたにも関わらず、日本の説話文學にみる地獄には相変わらず水平的な地獄観、熱地獄の觀念が根強く残っているのである。では經典と説話の食い違いはなぜ生じたのであろうか。この問いに答えるためにはまず經典に描かれた地獄の位置や構造、種類などに關する考察が先行されなければならず、この点を明らかにするのが本稿の目的である。考察の範囲は八熱地獄、八寒地獄、十六小地獄といった定型化された地獄像が形成するまでのベータ文獻から四阿含經までにする。資料の所在などは岩本裕(1965)『極樂と地獄』、三一書房、石田瑞麿(1985)『地獄』、法藏館の兩書に負うところ多く、細部において筆者の觀點を述べたことをことうわておく。

* 本稿は崇實大學校2004年度校内研究費によって作成されたものである。

** 崇實大學校 助教授 日本學科 古典文學

1) 『日本靈異記』の地獄説話については李市竣(2003、11)『『日本靈異記』の冥界觀』『日語日文學研究 第47集』、韓國日語日文學會を參照されたい。

2. ベーダにみる地獄

地獄思想は仏教占有のものではない。地獄というのは地下の牛獄の意味である。この名称はもともと中國にあったものではなく、インド語で地獄のことを「ナラカ(naraka)」とか「ニラヤ(niraya)」というが、地獄という中國語はこれの譯語であり、「ナラカ」は「奈落」と音寫された²⁾。地獄思想は仏教以前のインド古來の死者の考え方に由來するものであって、インド(アリア人)特有の宗教的・思想的活動が仏教にも多大な影響を与えた。アリア人の思想は紀元前1,200年頃から紀元後の2世紀ごろにかけて成立した。その思想は古代インドのバラモン教の宗教文獻であるベーダ³⁾によって窺い知れるが、ベーダには四種があり、その中でも最古の文獻として重視されるのが『リグ・ベーダ』である。

紀元前1200年ころに成立したベーダの一つとされている『リグ・ベーダ』(10巻 1,028歌)の「リグ」は賛歌の意で、神々への賛歌を集成したものである。『リグ・ベーダ』にはヤマが登場する。地獄の主である「閻魔(Yama)」はこの「ヤマ」の音寫であるわけであるが、ヤマや死後の世界に関する賛歌は五編(X・14-18)ある。そのうち、「ヤマ(死者の王)の歌」を抜粋すると以下のようである⁴⁾。

ヤマはわれらのため最初に道を見いだせたり。この牧場(樂土・死界)は奪い取らざるべきにあらず。われらの古き祖先が去り行きしところ、そこに後生(子孫)は、自己の道に従って[赴く]。…祖先と合同せよ、ヤマと[合同せよ]、祭祀・善行の[果報]と[合同せよ]、最高天(ヤマの居所)において。欠陥を棄てて、[汝の]家郷(死者の世界)に歸れ。光輝に満ちて、[新たな]身体と合体せよ。…この者(死者)のため、祖先はこの居所を設けたり。ヤマは、晝・水・夜もて飾れる安息所を彼に与う。サラマー(神話的牡犬)の子なる二匹の犬、四つ眼にして斑あるを、直路に過ぎり走れ。…ヤマよ、汝の二匹の番犬、四つ眼にして、道を守り、人間を監視するこれらの[犬]に、彼(死者)を託せ、王(ヤマ)よ。彼に安寧と無病とを授けよ。…ヤマのためソーマ(神酒)を捧げよ。ヤマに供物を捧げよ。莊嚴せられたる祭祀は、アグニ(火神)を使者として、實にヤマに赴く。グリタに富む供物をヤマに捧げよ。前方に進みいでよ。彼(ヤマ)がわれらを神々のもとに導かんことを、[われらが]長き命を生きんがために。

2) 定方晟(1980)『仏教にみる世界觀』、第三文明社、p.108

3) ヴェーダとは知識の意で、宗教的知識を總集した聖典の名称となったもの。ヴェーダには種あって、神々への賛歌を集めた『リグ・ベーダ』、旋律に合わせて歌う詩歌を集めた『サーマヴェーダ』、祭祀の實務に関する書を集めた『ヤジュルヴェーダ』、災厄を除く呪法の句を集めた『アタルヴァヴェーダ』である。また各ヴェーダの主要部分は『サンヒター(本集)』と呼ばれ、それぞれ賛歌歌詞祭詞呪詞の集録で、單にヴェーダという場合はこの部分をさす。サンヒターに付隨する文獻にブラーフマナ(祭儀書)、アーラニヤカ(森林書)、ウパニシャッド(奧義書)がある。サンヒターと付隨文獻を含めて廣義のヴェーダと呼ぶ。ヴェーダの成立は前15世紀からとされる。

4) 引用は辻 直四朗譯(1972)『リグ・ヴェーダ讚歌』、岩波書店、pp.230-231による。

以上の内容をみると、最初に死後の世界の道を見いだした人であり、四つ眼の番犬に死者を託するとある。死んだ人はヤマの居所なる最高天に行き、光輝くなかで新たな身体と合体することになる。ここでのヤマの世界は極苦の世界ではなく、ヤマは死者に安寧と無病とを与える樂土として描かれているのである。

これが、次の『アタルヴァ・ヴェーダ』になると⁵⁾、描寫が具体的になって、死者は風神マルトの微風に誘われて天國に伴われ、冷水によつてもとの体にもどるといふ。そして祖先の人たちと一緒にこの理想の樂土に住み、快樂の限りを盡くすることができる。一方、天國に對置される場所としての地獄が徐々にかたちを示すようになる。ここでは天國(スヴァルガ)に對置される場所は「ナラカ世界」(奈落)とよばれる。ここは、本來死者のおもむくべきところではなく、女性の惡魔と魔術師の住處であり、また殺人者の住處でもあるとされた。しかもナラカ世界は暗く、光を遮られた最下の世界であると記されている。死者の世界と限定はできないが、天國とも現世とも對蹠的な冥界であることはあきらかである。

この『アタルヴァ・ヴェーダ』以後、時代が降り後期のヴェーダ文獻になると、ヤマは人間の善惡の行爲を判定するものとなり、死後の審判者という地位を与えられる。

『ジャイミニヤ・ブラーフマナ』の「ブリグの地獄遍歴の物語」によると、ヴァルナ(司法神)の子ブリグは、その高慢をたしなめようと考へた父の神によつて六つの他界を遍歴して、そこにいる人間の苦しみ悩む姿をみたことを伝える。たとえば、人間に姿を変へた樹木によつて切り刻んで食べられたり、人間に姿を変へた家畜によつて食べられたりする。もちろん、樂土らしい様相がみられる場合もあるが、死後の樂土ヤマの世界が、死後の審判を行う地獄の觀念を持つものに変貌した。

また、紀元前數世紀ごろに口伝によつて伝えられ始めたといわれる叙事詩『マハーバーラタ』になると、ヤマは死者の國にあつて死者を裁くのである。その國は南方の地の果て、恐ろしい暗黒の世界であつて、罪人はさまざま責め苦を受けるとされる。その地獄はときに洞窟のようであつたり、ときに湖のようでもあり、様々「な」様相をもつたものとして描かれる。ヤマの性格が明確になるにつれ、地獄の思想も固定化する。『マハーバーラタ』は、その一つの頂点として記憶されなければならない。ヤマは祖父の主であり、餓鬼(プレータ)の王であり、しかも「法の王」として亡者を裁斷する。死んだ人間はすべてヤマの王宮に行かなければならない。ヤマの國土は南方の地のはてにあり、暗黒につつまれている。その國土へいたる道は恐ろしく、途中には木陰をつくる樹木もない。飲む水もなければ休む場所もない。亡者はヤマの意志を執行する使者によつて引きずっていかれるが、生前に物惜しみせず、また苦行をしたものには救いがある。生前に灯火を与へたものは途中で灯下が道を照らして、斷食を行つたものは乳酪を与えられる。プシュポーターダカーという川があるが、その水は惡業の人には膿汁のようであり、生前に人に水を恵んだ人には甘美な水となる。

地獄では、こん棒や槍や、火の壺をもつ殘忍な獄卒が罪人を責め苦しめ、罪人たちはまた劍の林や熱砂や茨の木で責めさいなまれる。虫が罪人たちをかじり、犬が彼らを食い、彼らはまた血

5) 以下の内容は岩本裕(1965)『極樂と地獄』、三一書房と石田瑞磨(1985)『地獄』、法藏館と金岡秀友(1988)『地獄・極樂思想の系譜』、『地獄と極樂』、集英社、pp.23-25を適宜整理したものである。

の川、ヴァイタラニーに放り込まれる。彼らは熱砂で焼かれ、劍の葉と「を」もつ樹木に身を切られ、剃刀の葉に身を削られる。彼らは水を求めても無駄であり、飢渴に苦しまなければならない。

とくに、ソーマ酒を賣るものは三百年間「叫喚地獄(ラウラヴァ)」に墮ちて、再びうまれるときは虫けらなどになる。殺人者は地獄に彼が流した血の滴りの数だけの年数をとどまり、姦通の罪を犯したものは、彼の身体の毛孔の数だけの年数、地獄にとどまるのだ、とされる。

このように紹介された後、岩本は『マハーバーラタ』の地獄を「地獄は水氣の多いところで、あるいは湖とも、あるいは泥土の洞窟とも記され、また最下の世界にあるとも記される。しかし、その数は不明である。次のように要約する。いずれにせよ、後述する仏教における地獄の展開の先驅をなしている。」⁶⁾と要約する。

このような地獄の諸相は、西暦前二世紀ごろに成立したとされる『マヌの法典』『ヤージュニヤ・ヴァルキヤ法典』などになると、顕著な特色がそこに目立ってくる。それは、多彩多様な地獄の分化、地獄名の頻出であって「二十一」の地獄に整理されてくる。

3. 初期經典にみる地獄

仏教に受容されたヤマは、一つは天に昇って、夜摩天(焰摩天)となった。欲界の第三天で、輝く光に満ち溢れて晝夜の別がなく、不思議な歡樂の世界とされる。いま一つは地にもぐって閻魔王となり、地獄の主権者とされた。それがいつごろから、このように分れて取入れられたか、明らかにしえないとしても、かなり早い時期であったとみることはできる。

初期の經典が説くところでは、閻魔王の支配する地獄そのものの記述は、かなり単純なもののみでいい。たとえば『ダンマ・パダ(『法句経』、眞理のことは)』⁷⁾には「來世」と「この世」の對立(第17)に基づいて悪い行いをした人は地獄(悪い所、閻魔王の世界)に墮ちると説かれるが、どのような責め苦を受けるのか、地獄はどこにあるのかなどについては触れない。ただし、閻魔王と同時に後の獄卒たる「閻魔王の從卒」(第235)が登場しており、不守戒律の人は「火炎のように熱した鐵丸を食うほうがましだ」(第308)と責め苦を忍ばせる記述は注目されよう⁸⁾。一方『ウダーナルガ(感興のことは)』⁹⁾の方も

6) 岩本裕(1965)『極樂と地獄』、三一書房、p.165

7) 『法句経』(ダンマ・パダ、眞理のことは)はパーリ語で書かれた南方上座部のテキスト。全編423の詩からなるが、ある時期に一人の人が書き下したような作品ではなく、原始仏教教団の中であって、いろいろな形で伝えられていた詩を集めて編纂したものである。編纂の時期はB.C4-3世紀であろうが、個々の詩ははるかに古い起源を有する。

水野弘元(1983)『仏典解題事典』、春秋社、P.66参照。

8) 引用は中村元譯(1978)『ブツダの眞理のことは感興のことは』、岩波書店による。・悪いことをなす者は、この世で悔いに悩み、來世でも悔いに悩み、ふたつのところで悔いに悩む。……苦難のところ(=地獄など)におもむいて(罪のむくいを受けて)さらに悩む。(第17)・だれがこの大地を制服するであろうか?だれが閻魔の世界と神々ともなるこの世界とを制服するであろうか?(第44)・或る人々は[人の]胎に宿り、惡をなした者どもは地獄に墮ち、行ないのよい人々は天におも

それほど変わりはない。地獄関連の詩を拾ってみると、約16個所があり、そのうち1個は『スッタニパータ』と10)、6個は『ダンマ・パダ』と関連する11)。両者の関連詩を見比べるとほとんどの内容は酷

むき、汚れの無い人々は全き安らぎに入る。(第126)・手むかうことなく罪咎の無い人々に害を加えるならば、……この愚かな者は、身やおぼれてのちに、地獄に生まれる。(第137-140)・世の中は泡沫のごとしと見よ。世の中はかげろうのごとしと見よ。世の中をこのように観ずる人は、死王もかれを見ることができない。(第170)・汝はいま枯葉のようなものである。閻魔王の従卒もまた汝に近づいた。汝はいま死出の門路に立っている。しかし汝には旅の資糧さえも存在しない。(第235)・汝の生涯は終りに近づいた。汝は閻魔王の近くにおもむいた。汝にはみちすがら休らう宿もなく、旅の資糧も存在しない。(第237)・鐵から起った鍔が、それから起ったのに、鐵自身を損なうように、悪をなしたならば、自分の業が罪を犯した人を悪いところ(地獄)にみちびく。(第240)・いつわりを語る人、あるいは自分がしておきながら「わたしはしませんでした」と言う人——この両者は死後にはひとしくなる、——來世では行いの下劣な業をもった人々なのであるから。(第306)・袈裟を頭から纏っていても、性質が悪く、つつしみのない者が多い。かれらあくにんは、悪いふるまいによって、悪いところ(地獄)に生れる。(第307)・戒律をまもらず、みずから慎むことがないのに國の信徒の施しを受けるよりは火炎のように熱した鐵丸を食うほうがましだ。(第308)・放逸で他人の妻に近なれ近づくと、…地獄に墮ちる。(第309)・禍をまねき、悪しきところ(地獄)に墮ち、相ともにおびえた男女の愉樂はすくなく、王は重罰を課する。それ故にひとは他人の妻になれ近づくな。(第310)・茅草でも、とらえ方を誤ると、手のひらを切るように、修行者の行も、誤っておこなうと地獄にひきずりおろす。(第311)・辺境にある、城壁に囲まれた都市が内も外も守られているように、そのように自己を守れ。瞬時も空しく過ぐすな。時を空しく過ぐした人々は地獄に墮ちて、苦しみ悩む。(第315)・恥じなくてよいことを恥じ、恥ずべきことを恥じない人々は、邪な見解をいできて、悪いところ(=地獄)におもむく。(第316)・恐れなくてよいことに恐れをいだき、恐れねばならぬことに恐れをいだかない人々は、邪な見解をいできて、悪いところ(=地獄)におもむく。(第316)・避けねばならぬことを避けてもよいと思ひ、避けてはならぬ(=必ず為さねばならぬ)ことを避けてもよいと考える人々は、邪な見解をいできて、悪いところ(=地獄)におもむく。(第318)・遠ざけるべきこと(=罪)を遠ざけるべきであると知り、遠ざけてはならぬ(=必ず為さねばならぬ)ことを遠ざけてはならぬと考える人々は、正しい見解をいできて、善いところ(=天上)におもむく。(第319)

- 9) 『ウダーナヴァルガ』(感興のことば)は説一切有部の系統のもので、33品からなり、『法句經』とパーリ聖典『ウダーナ』を合わせたごとき内容を持つ。1-2世紀ごろ法救(ダルマトラータ)が撰したものとされる。水野弘元(1983)『仏典解題事典』、春秋社、P.66参照。
- 10) 引用は中村元譯(1978)『ブッダの眞理のことば感興のことば』、岩波書店による。・悪口をいい、また悪意を起こして聖者を毀る者は、十万のニラルパダ地獄と三十六と五千のアルパダ地獄におもむく。(8-5、『スッタニパータ』660)
- 11) 『ダンマ・パダ』と関連する詩は次のようである。引用は中村元譯(1978)『ブッダの眞理のことば感興のことば』、岩波書店による。・禍をまねき、悪しきところ(地獄)に墮ち、相ともにおびえた男女の愉樂はすくなく、王は重罰を課する。ひとは他人の妻になれちかづいてはならぬ。身体が崩壊したのちには、地獄で火に焼かれる。(4-15、『ダンマ・パダ』310)・いつわりを語る人は地獄に墮ちる。またこの世で自分が言ったのは異なった行ないをなす人は地獄に墮ちる。この両者は死後にひとしくなると説かれている。(8-1、『ダンマ・パダ』301)・袈裟を頭から纏っていても、性質が悪く、つつしみのない者が多い。かれら悪人は悪いふるまいによって死後には悪いところ(地獄)に生れる。(11-9、『ダンマ・パダ』307)・恥じなくてよいことを恥じ、恥ずべきことを恥じないで、恐ろしくないことを恐れ、恐ろしいことを恐れない人々は、邪な見解をいできて、悪いところ(=地獄)におもむく。(16-4、『ダンマ・パダ』316、317)・心が煩惱に汚されることなく、心が縛られることなく、善悪をはからいを捨てた人には、悪い領域(=地獄)におちるのではないかという恐れが無い。(28-6『ダンマ・パダ』36)・手むかうことなく罪咎の無い人々に害を加えるならば、次に擧げる十種の場合のうちのどれかに速かに陥るであろう、…身やおぼれてのちに、悪いところ(=地獄)に生れる。(28-29、『ダンマ・パダ』137-140)

その他の用例は次のようである。・悪い行ないをした人々は地獄におもむき、善いことをした人々は善いところ(=天)に生まれるであろう。しかし他の人々はこの世で道を修して汚れを去り、安らぎに入るであろう。(1-24)・世俗的であっても、すぐれた正しい見解をもっているならば、その人は千の生涯を経ても、地獄に墮ちることがない。(4-9)・悪人と善人とは、死後には

似しているが、以下の若干の違いもみうけられる。

- ㉑ 禍をまねき、悪しきところ(地獄)に墮ち、相ともにおびえた男女の愉樂はすくなく、王は重罰を課する。それ故にひとは他人の妻になれ近づくな。(第310)→・禍をまねき、悪しきところ(地獄)に墮ち、相ともにおびえた男女の愉樂はすくなく、王は重罰を課する。ひとは他人の妻になれちかづいてはならぬ。身体が崩壊したのちには、地獄で火に焼かれる。(4-15)
- ㉒ 心が煩惱に汚されることなく、おもいが亂れることなく、善悪のはからいを捨てて、目覚めている人には、何も恐れることが無い。(第39)→・心が煩惱に汚されることなく、心が縛られることなく、善悪のはからいを捨てた人には、悪い領域(=地獄)におちるのではないかという恐れが無い。(28-6)

まず㉑の場合、他人の妻に近づいた報いか説かれていたが、『ウダーナルガ』には、『ダンマ・パダ』にはない墮地獄の業火のことが付加されている。『ダンマ・パダ』には地獄の業火を連想させる記述があったと前述したが、『ウダーナルガ』では明確に地獄の責め苦として業火が記述されているわけだ。続いて㉒であるが、煩惱を断切った人に対して『ダンマ・パダ』にはただ「何もおそれることがない」というが、『ウダーナルガ』では具体的に墮地獄の恐れから逃れることができる、という。ともかく『ウダーナルガ』の方も『ダンマ・パダ』と同様、墮地獄の因だけが全面に出ており、地獄そのものに関する記述は見受けられない。

他に『ウダーナルガ』で注目すべき詩は具体的に地獄の名が取り上げられている以下の詩である。

悪口をいい、また悪意を起して聖者を毀る者は、十万のニラルブダ地獄と三十六と五千のアルブダ地獄におもむく。(8-5)

この「ニラルブダ」「アルブダ」の二地獄は後の經典では「寒地獄」の名としてあがってくるものであるが、この詩そのものが『スッタニパーダ』の「悪口を言いまだ悪意を起して聖者をそしる者は、十万と三十六のニラップダの〔巨大な年数のあいだ〕また五つのアップダの〔巨大な年数のあいだ〕地獄に赴く。」(660)にも登場する。

異なるところにおもむく。悪人は地獄におもむき、善人は天上に生まる。(5-27)・悪い心のある人々は實に嘘を言う。つねに地獄(の苦しみを)増して、おのれを傷ける。欠点の無い力のある人は、心の混濁を除いて、(すべてを)忍ぶ。(8-6)・鐵から起った錆が、それから起ったのに、鐵自信を喰いつくすように、悪をなしたならば、自分の業が、靜かに氣をつけて行動しない人を悪いところ(地獄)にみちびく。(8-19)・人々は因縁があって善い領域(=天)におもむくのである。ひとびとは因縁があって悪い領域(=地獄)におもむくである。ひとびとは因縁があって完き安らぎ(ニルヴァーナ)に入るのである。このように、このことは因縁にもとづいているのである。(26-9)・悪いことをしたならば、ひとは憂える。秘密のうちにしたことであっても、ひとは憂える。悪いところ(=地獄など)におもむいて(罪のむくいを受けて)さらに悩む。(28-36)・悪いことをするよりは、何もしないほうがよい。悪いことをすれば、後に悔いる。悪いことをしたならば、(のちに)憂える。悪いところ(=地獄)に行つて憂える。(29-41)・道理を實踐する人を、つねに道理が守る。道理をよく實踐すると、幸せを受ける。道理をよく實踐すると、このすぐれた利益がある。道理を實踐する人は悪いところ(=地獄)におもむかない。(30-7)

『スッタニパーダ』における地獄関連記述は『ウダーナルガ』『ダンマ・パダ』の二書よりもっと具体的である。特に関連記述は前半の散文と後半の偈からなっている「コーカーリヤ」に集中している。「コーカーリヤ」の前半の散文の内容は修行僧のコーカーリヤとブツダの問答から書き起こされる。コーカーリヤはサーリブッタ(舍利弗)とモッガラナーナ(目連)について彼らは「邪念」と「悪い欲求」に囚われているとブツダに告げる。まもなく、彼の全身に腫れ物ができ、最初は芥子粒ほどであったものがどんどん膨れ上がって破裂し、膿と血とが迸り出た。そこでコーカーリヤはその病苦のために死去し紅蓮地獄に墮ちた。後一人の修行僧がブツダに紅蓮地獄における寿命の長さを聞き、ブツダは次のように答える¹²⁾。

たとえば、コーサラ國の升目ではかつて二十カーリカの胡麻の積荷(一車輛分)があって、それを取り出すとしよう、ついで一人の人が百年をすぎることには胡麻を一粒ずつ取り出すとしよう。その方法によって、コーサラ國の升目ではかつて二十カーリカの胡麻の積荷(一車輛分)が速かに盡きたとしても、一つのアップダ地獄はまだ盡きるに至らない。二十のアップダ地獄は一つのニラップダ地獄〔の時期〕に等しい。二十のニラップダ地獄は一つのアババ地獄〔の時期〕に等しい。

以後、アババ地獄の二十倍であるアハハ地獄、アハハ地獄の二十倍であるアタタ地獄が連なり、このような方法で黄蓮地獄、白睡蓮地獄、青蓮地獄、白蓮地獄、紅蓮地獄と続く。「Aの多数集まったものがBの一つに等しい」という表現様式は、ウパニシャッドの中に現れているがそれが反映しているわけだ。アップダ地獄から紅蓮地獄まで十個の地獄名が見られ、石田瑞磨氏はこの散文の部分は、『スッタニパーダ』にはもともとふくまれていなかったらしい最後の二偈の一つである「紅蓮地獄に運び去られた者(の寿命の年数は、荷車につんだ胡麻の数ほどある、と諸々の智者は計算した。すなわちそれは五千兆年とさらに一千万の千二百倍の年である。(677)」を意識して編集されたものと考え、「地獄を十に整理するのは、もっと後になってから」と推測している¹³⁾。一方、地獄の様相はというと、地獄に墮ちた者どもは鐵の串、鐵の槍で突かれたり(667)、火炎の中(668)や銅製の釜(670)、膿や血のまじった湯釜(671)、蛆虫の棲む水釜(672)、鋭い劍の葉のついた林(673)などに入れられて苛まれる。或は黒犬や斑犬や黒鳥の群や野狐などに貪り食われる(675)¹⁴⁾。以上の責苦は後の時代にごく典型

12) 引用は中村元(1985)『ブツダのことば』、岩波書店、p.143による。

13) 石田瑞磨(1985)『地獄』、法藏館、pp.16-17

14) ・嘘を言う人は地獄に墮ちる。また實際にしておきながら「わたしはしませんでした」と言う人もまた同じ。兩者ともに行爲の卑劣な人々であり、死後にはあの世で同じような運命を受ける(地獄に墮ちる)。(661)・口穢く、不實で、卑しい者よ。生きものを殺し、邪惡で、惡行をなす者よ。下劣を極め、不吉な、でき損ないよ。この世であまりおしゃべりするな。お前は地獄に墮ちる者だぞ。(664)・お前は塵を撒いて不利を招き、罪をつくりながら、諸々の善人を非難し、また多くの惡事をはたらい、長いあいだ深い坑(地獄)に陥る。(665)・(地獄に墮ちた者は鐵の串を突きさされるところに至り、鋭い刃のある鐵の槍に近づく。さてまた灼熱した鐵丸のような食物を食わされるが、それは、(昔つくった業に)ふさわしい当然なことである。(667)・(地獄の獄卒どもは「捕まえよ」「打て」などといって)、誰もやさしいことばをかけることなく、(溫顔をもって)向ってくることなく、頼りになってくれない。(地獄に墮ちた者どもは)、敷き擴げられた炭火の上に臥し、あまねく燃え盛る火炎の中に入る。(668)・またそこでは(地獄の獄卒どもは)鐵の網をもって(地獄に墮ちた者どもを)からめとり、鐵槌をもって打つ。さらに眞の暗黒である闇に至るが、その闇はあたかも霧のようにひろがっている。(669)・また次に(地獄に墮ちた者どもは)火炎があまねく燃え盛っている銅製の釜に入る。火の燃え盛るそれらの釜の中で永いあいだ煮られて、浮き沈みする。(670)・また膿や血のまじった湯釜があり、罪を犯した人はその中で煮られる。かれがその釜の中でどちらの方角へ向って横たわろうとも、(膿と血とに)触れて汚される。(671)

的な責苦として登場している点が注目される。ただし、『スッタニパーダ』において、さまざまな悪業は説かれているにも関わらず以上の「コーカーリヤ」を除くと地獄と関連づけて説いている記述は幾つかを数えるにすぎない¹⁵⁾。この点、散文の具体的な名前が登場しているにも関わらず後の地獄の責苦がどの地獄に属するかを説明していない点も合わせて、まだ、地獄の思想は組織化されていないのである。

インドにおける初期の仏教教団が伝持してきた原始経典である四阿含、すなわち長阿含經、中阿含經、増阿含經、雜阿含經には地獄思想において整備された、内容的に豊富な経典群が登場する。各経典の前後関係は不確かなので、一応、簡単な記述から拾ってみることにしたい。『中阿含經』卷十二の「天使經」には閻王(天王とも)罪を犯して閻王の境界に生まれた人を裁く場面があって、罪人は五天使によって「善く問ひ善く檢し善く教へて善く訶し已り」獄卒の手に渡る。獄卒は「四門大地獄」で次のような頌をいう。

四柱有四門、壁方十二楞、以鐵爲垣蓄、其上鐵覆蓋、地獄內鐵地、熾熱鐵火布、
深無量由延、乃至地底住、極惡不可受、火色難可見、見已身毛堅、恐懼怖甚苦、
彼墮生地獄、脚上頭在下、誹謗諸聖人、調御善清善(『新修大藏經第一卷』504 下)

まず、地獄の位置に關してであるが、深さが無量由延にして地底にあるといい、具体的な記述では

・また蛆虫の棲む水釜があり、罪を犯した人はその中で煮られる。出ようにも、つかむべき縁がない。その釜の上部は内側に彎曲していて、まわりが全部一樣だからである。(672)・また鋭い劍の葉のついた林があり、(地獄に墮ちた者どもが)その中に入ると、手足を切斷される。(地獄の獄卒どもは)、鉤を引っかけて舌をとらせ、引っ張りまわし、引っ張りまわして叩きつける。(673)・また次に(地獄に墮ちた者どもは)、越え難いヴェータニー河に至る。その河の流れは鋭利な剃刀の刃である。愚かな輩は、悪い事をして罪を犯しては、そこに陥る。(674)・そこには黒犬や斑犬や黒鳥の群や野狐がいて、泣きさけぶかれらを貪り食うて飽くことがない。また鷹や黒色ならぬ鳥どもまでが啄む。(675)・罪を犯した人が身に受けるこの地獄の生存は、實に悲惨である。だから人は、この世において余生のあるうちになすべきことをなして、忽せにしてはならない。(676)・紅蓮地獄に運び去られた者(の壽命の年數)は、荷車につんだ胡麻の數ほどある、と諸々の智者は計算した。すなわちそれは五千兆年とさらに一千万の千二百倍の年である。(677)・ここに説かれた地獄の苦しみがどれほど永く續こうとも、その間は地獄にとどまらねばならない。それ故に、ひとは清く、温良で、立派な美德をめざして、常にことばとところをつつしむべきである。(678)

15)・そうすれば、現世においては非難せられ、來世においては悪いところに生まれる。(141)・自身を實在とみなす見解と疑いと外面的な戒律・誓いという三つのことがらが少しでも存在するならば、かれが知見を成就するとともに、それらは捨てられてしまう。かれは四つの悪い場所から離れ、また六つの重罪をつくるものとはなり得ない。(231)・起きてよ、坐れ。平安を得るために、ひたすらに修行せよ。汝らが怠惰でありその〔死王の〕力に服したことを死王が知って汝らをまよわしめることがなかれ。(332)・神々も人間も、ものを欲しがり、執著にとらわれている。この執著を越えよ。わずかの時をも空しく過すことなかれ。時を空しく過した人は地獄に墮ちて悲しむからである。(333)・この世で一切の罪惡を離れ、地獄の責苦を超えて努め勵む者、精勵する賢者、一一そのような人が〈勤め勵む者〉と呼ばれるのである(531)。(141)の「悪いところ」に關して中村氏は「duggati.漢譯では「惡趣」「惡道」と譯す。普通は「地獄」「餓鬼」「畜生」の三つをいい、後には、そのほかに「修羅」を數えることもある」と註を付している(中村元譯(1984)『ブッダのこゝろ』、岩波書店、p.281)。また、(231)の「四つの悪い場所」に關して中村氏は「catu apāyāh は「四惡趣」と漢譯される。地獄、餓鬼、畜生、阿修羅をいう。普通は「地獄・餓鬼・畜生」を三惡道という。ただし注釋から見ると、ここでは四惡道を認めていたのではなくて、三惡道という境地と、そのほかに阿修羅という特殊な生存者の身体を認めていたのである。」と説明する(中村元譯(1985)『ブッダのこゝろ』、岩波書店、p.302)。一方、死王について中村氏は「maccurāja 惡魔(Māra)というのと同じ」という(中村元譯(1985)『ブッダのこゝろ』、岩波書店、p.318)。

ないものの「地底」と明記している点は以前の経典にはないところで注目に値するであろう。ちなみに閻王の住所はただ「閻王の境界」とあって、罪人が閻王を「天王」と仰ぎ、閻王の使いとして「天使」が登場している点を考え合わせると、この段階での閻魔王の住所はまだ天である可能性がある。上記の頃の以後は「四門大地獄」と呼ばれる理由が述べられる。すなわち、「極大久遠」の後に、地獄の四面、東南西北の四門が順次に開くが結局すべての門は閉ってしまい罪人は出られず極重の苦を受ける。「極大久遠」の後に彼らは「四門大地獄」から抜け出るが今度は「峰巖地獄」、「糞屎地獄」、「鐵鑠林地獄」、「鐵劍樹林地獄」、「灰河」に生じて責苦をうける。もしこの過程で彼の悪不善の業が一切盡きていないと、再び「灰河」に墮ち「鐵劍樹林地獄」、「鐵鑠林地獄」、「糞屎地獄」、「峰巖地獄」の順に廻って「四門大地獄」に入ることになる。もし、この過程で彼の悪不善の業が一切盡き残ったものが無ければ、始めて罪人は畜生、餓鬼、天などに生じることができるといふ。石田氏は「四門の外には、東・西・南・北に順次に峰巖地獄、糞屎地獄、鐵鑠林地獄、鐵劍樹林地獄と呼ばれる地獄がある。罪人はこの順序で、峰巖地獄から徐々に順次、途中の地獄を経て鐵劍樹林地獄へと送られ、また逆行して峰巖地獄に戻って、四門大地獄に歸るとされる」¹⁶⁾と説明して、四つの小地獄(峰巖地獄、糞屎地獄、鐵鑠林地獄、鐵劍樹林地獄)が四門の東西南北におのおの位置しているかに解釋しているが、本文のどこにもこのような説明を裏付ける記述はない。本文には「四門の大地獄より出で四門の大地獄の次に峰巖地獄に生ず」、「峰巖地獄の次に糞屎地獄に生ず」などと記述されているだけである。石田氏が数えていない「灰河」においても「灰河に生ず」とほかの地獄に落ちる表現とまったく同じであって、「灰河」は鐵劍樹林地獄に属しているものではなく、糞屎地獄、鐵鑠林地獄などと同じような次元の個別の地獄として解するのが妥当ではないだろうか。ただ、中心となる四門大地獄に終わらずほかに五つの地獄が紹介されているのは、後の十六小地獄(経典によっては、格子・別處・増などといった表現が使われる)と関連して注目しておきたい。

責苦の描寫は豊富かつ具体的であって、火の中で身体が燃え盡きても元通りに生じて死ぬことができない「峰巖地獄」、糞屎の中で凌瞿來という虫に足から骨まで最後には骨髓まで食い盡くされるが死ぬことができない「糞屎地獄」、熱風によって落ちた鐵鑠に手足など体中を切り裂かれ、極大の犬や大烏鳥などに体中を食い潰される「鐵鑠林地獄」、鐵劍樹に昇らせられ身体中を刺されたり、鐵劍に身を刺される「鐵劍林地獄」、沸灰湯の河の中で身の皮肉が煮え落とされ、河から出ると熱鐵丸を飲まされる「灰河」など責苦の描寫は豊富かつ具体的である。

一方、上述の「天使経」の「四門大地獄」を敷衍・潤色したと思しい内容が『増一阿含經』卷二四の「善聚品」に見える。同じく五天使の登場、閻魔王の裁判を経て罪人は地獄の獄卒に手に渡り地獄に入れられる。ここでは閻魔王に對して「天王」という名前は使われていないが、閻魔と「天」の關係が以前の段階より切り離されたと推測される。罪人が最初落ちる「大地獄」の様子は次の偈から窺い知れる。

四壁四城門、廣長實爲牢、鐵籠之所覆、求出無有期、彼時鐵地上、火然極爲熾、
壁方百由旬、洞然一種色、中央有四柱、睹之實恐畏、及其劍樹上、鐵犄鳥所止、
臭處實難居、睹之衣毛豎、種種之畏器、隔子有十六(『新修大藏經第二卷』675 中)

まず、注目されるのは「天使経」では地獄が地の底に位置して、墮極の人は「脚上頭在下」にして深

16) 石田瑞曆(1985)『地獄』、法藏館、p.21

さ「無量由延」を落ちるされるが、ここではそっくり省かれている。この段階では地獄の位置は地底であるとの認識が当たり前であると考えられていたからであろう。「鐵嘴鳥」のことが添加されているが、「天使経」の「鐵鑠林地獄」に登場した大烏鳥となんらかの繋がりが推測される¹⁷⁾。もう一つ注目されるのは下線を引いた「隔子有十六」の部分である。「天使経」では曖昧に説かれた部分がここでは大地獄に付属している小地獄が十六個あると明記されているのである。しかし、十六の地獄の名前がちゃんと出ているわけではない。責苦を受けながらも悪業の余りある墮獄の人は大地獄から出て「熱灰地獄」、「大熱灰地獄」、「刀劍地獄」、「沸屎地獄」を順次に廻り、滅罪しきれないと「還って熱屎地獄・刀劍地獄・大熱灰地獄に入り・還り來って爾許の地獄を経、是の時彼の衆生、苦を受くるに堪えず、還って頭を廻らして熱屎地獄の中に至る…是の時彼の衆生、苦を受くるに堪えず、還って沸屎地獄・劍樹地獄・熱灰地獄に入り、還って大地獄の中」¹⁸⁾に入ることになる。「天使経」の場合、各地獄を単純に一回りするのに対して、ここではまず熱灰地獄から沸屎地獄まで廻って熱屎地獄を軸に二種類の循環の経路を辿っている点が違う。次に、地獄の種類であるが、名前が明記されているのは六つであって、十六となっていない。「爾許(そこばく)の地獄を経」という記述をみると以下は省略されたと考えられる。否、省略されたというより明確な概念が定着していなかったと見え、各地獄の責苦に関する記述が最初の熱灰地獄から沸屎地獄までだけになっている点がこれを裏付けてくれる。他に大地獄での責苦と小地獄の責苦が重なる場合もあってまだ整然と整理されていないのであるが、『中阿含經』の地獄と比較して、その付属の地獄が十六に増加するようになる点は注意しておこう。

十六の小地獄の名前が見えるのは同じ『増一阿含經』卷三六の「八難品」においてである。また、大地獄が八大地獄に擴大されている点も見逃せない。世尊が諸比丘に「有八大地獄。云何。一者還活地獄。二者黑繩地獄。三者等害地獄。四者涕哭地獄。五者大涕哭地獄。六者阿鼻地獄。七者炎地獄。八者大炎地獄。」と告げており各地獄の名前の由來が後で述べられる。一方、地獄の様子に關しては世尊の以下の偈をもって窺い知れる。

還活及黑繩、等害二涕哭、五逆阿鼻獄、炎大炎地獄、此名八地獄、其中不可處
皆由惡行本、十六隔子圍、然彼鐵獄上、爲火之所燒、遍一由旬內、熾火極熱盛
四城四門戶、其間甚平整、又以鐵作城、鐵板覆其上(『新修大藏經第二卷』747 下)

地獄の様子は四つの城、四門戶、鐵製の蓋、十六隔子など『増一阿含經』の「善聚品」と大同小異である。ただし、注目すべきは「善聚品」では揃わなかった地獄の名が以下のように明記されている点である。

一一地獄有十六隔子。其名優鉢地獄・鉢頭地獄・拘牟頭地獄・分陀利地獄・未曾有地獄・永無地獄・愚惑地獄・縮聚地獄・刀山地獄・湯火地獄・火山地獄・灰河地獄・荊棘地獄・沸屎地獄・劍樹地獄・熱鐵丸地獄。如是比十六隔子不可稱量。(『新修大藏經第二卷』748 上)

十六の地獄の名前の後には幾つかの小地獄での責苦が述べられるが、名前や關連する單語だけを拾ってみると、「刀山」「火山」「劍樹地獄」「熱鐵丸」「熱灰地獄」「逆刺地獄」「熱屎地獄」となるが、後半

17) 「鐵鑠林地獄」に登場した大烏鳥も鐵嘴で罪人の頭骨を破るとされている。

18) 引用は林五邦譯(1978)『國譯一切經 九・十』、大東出版社、p.9 による。

の三つの地獄は前述した小地獄の名前と合致しない¹⁹⁾。さらに、「優鉢地獄」から「縮聚地獄」までの八つの地獄に関しては何の説明も施されていない。すなわち、八大地獄と十六の小地獄の区別が明確になったといえるが、十六小地獄に関する概念はまだ定着していないといえよう。

他に「天使経」と違う点を挙げると、今までは大地獄に十六個の小地獄が付属しているとされたが、ここでは下線の個所が示すように各地獄ごとに十六個の小地獄が付属していると明記している。また、見逃してはならない点は悪業の種類と地獄がセットで認識されるようになったということである。以前は大地獄と小地獄を悪業が盡きるまで循環をするようになっていたものが、ここではある特定の悪業によってある特定の地獄に墮ちるとされる。ただし、八大地獄の各地獄における業因には触れているが²⁰⁾、十六地獄に墮ちる悪業については「其有衆生造諸雜業。命之後生十六隔子中。」と、漠然と「諸雜業」というだけである。

同じく『増一阿含經』の卷三四の「七日品」には地獄の位置を考える上で参考となる以下のような記述が見いだされる。

須彌山頂東・西・南・北。縱廣八萬四千由旬。近須彌山南有大鐵圍山。長八萬四千里。高八萬里。又此山表。有尼彌陀山圍彼山。去尼彌陀山。復有山名佉羅山。去此山。復更有山名俾沙山。去此山。復更有山名馬頭山。復更有山名毘那耶山。次毘那耶山名鐵圍大鐵圍山。鐵圍中間有八大地獄。一一地獄有十六隔子。然彼鐵圍山於閻浮里地多所饒益。閻浮里地設無鐵圍山者。此間恒當臭處。(『新修大藏經第二卷』736上)

須彌山に近く大鐵圍山があり、これを尼彌陀山が囲み、さらに尼彌陀山は佉羅山が囲むようにして最後には鐵圍大鐵圍山があって、八大地獄は鐵圍中間の中間にあるとされる。「鐵圍中間」というのは最初の大鐵圍山と最後の鐵圍大鐵圍山の間を指しているのであろう。また、「一一地獄有十六隔子」からは小地獄が十六個として定着していたことが明確に読み取れる。

兩鐵圍山の間に地獄が位置していると説くのは『佛說長阿含經』においても同じである。卷第十九、「世紀經地獄品第四」には、

佛告比丘。此四天下有八千天下圍遶其外。復有大海水周匝圍遶八千天下。復有大金剛山遶大海水。金剛山外復有第二大金剛山。二山中間窈窈冥冥。日月神天有大威力。不能以光照及於彼。彼有八大地獄。其一地獄有十六小地獄。第一大地獄名想。第二名黑繩。第三名堆壓。第四名叫喚。第五名大叫喚。第六名燒炙。第七名大燒炙。第八名無間。其想地獄有十六小獄。小獄縱廣五百由旬。第一小獄名曰黑沙。二名沸屎。三名五百丁。四名飢。五名渴。六名一銅釜。七名多銅釜。八名石磨。九名膿血。十名量火。十一名灰河。十二名鐵丸。十三名鉞斧。十四名豺狼。十五名劍樹。十六名寒冰(『新修大藏經第一卷』121下)

19) もちろん内容的には「熱灰地獄」は「灰河地獄」と、「逆刺地獄」は「荊棘地獄」と「熱屎地獄」は「沸屎地獄」は何らかの関わりをもっていると予測できる。ちなみに「天使経」では「熱屎地獄」と「沸屎地獄」は別の地獄として区分されている。

20) 彼或有衆生毀正見者。誹謗正法而遠離之。命終之後皆生還活地獄中。諸有衆生好喜殺生。便生黑繩地獄中。其有衆生屠殺牛・羊及種種類。命終之後生等害地獄中。其有衆生不與取。竊他物者。便生涕哭地獄中。其有衆生常喜淫洗。有復妄語。命終之後生大涕哭地獄中。其有衆生殺害父母。破壞神寺。鬥亂聖衆。誹謗聖人。習倒邪見。命終之後生阿鼻地獄中。其有衆生。此間聞語。復傳來至彼。設彼聞聞。復傳來至此。求人方便。彼人命終之後生炎地獄中。其有衆生鬥亂彼此。貪著他物。興起慳疾。意懷猶豫。命終之後生大炎地獄中。(『新修大藏經第二卷』748上一中)

と見える。四天の周囲を八千天下が囲み、八千天下の周囲を大海水が囲む。さらに大海水を大金剛山が囲み、また大金剛山の外には二大金剛山がある。この二つの間に八大地獄が存在し、そこは日月神の威力が及ばない「窈窈冥冥」の状態であるという。『國譯一切經一』の注には、金剛山について「金剛山(Vajira-pabbata)は、世界を圍遶する鐵圍山を云ふ。」と説明している²¹⁾。『増一阿含經』「七日品」と比較すると細部の記述においては食い違いがあるが、兩鐵圍山の間に地獄が位置している点では同じである。つづいて、八大地獄の想、黒繩、堆壓、叫喚、大叫喚、燒炙、大燒炙、無間の名が取り挙げられているが、名前だけを見るかぎり『増一阿含經』「八難品」の還活地獄、黒繩地獄、等害地獄、涕哭地獄、大涕哭地獄、阿鼻地獄、炎地獄、大炎地獄などとは異同があって注目される。兩者の名前の由來の一部を要約すると以下のようである。

『増一阿含經』「八難品」	名前の由來	『長阿含經』「世紀經」	名前の由來
㉑ 還活地獄	復有彼衆生形體挺直。亦不動搖。爲苦所逼。不能移轉。形體以無肉血。是時。衆生自相謂言。衆生還活。還活。是時。彼衆生便自還活。	① 想	衆生が鐵爪で失相(たがい)に毒害の相を懷き相搔く。冷風が吹き皮肉還生す。尋いで活き起立して自ら相言す。「我今已に活く」。余の衆生言く。「我れ想ふ。汝活く」と
㉒ 黒繩地獄	罪人の形体、筋脈皆化して繩となり、鋸を以て身をひく。	② 黒繩	獄卒は罪人の身に熱鐵繩で線を引いて熱鐵斧をもってこれを破る。
㉓ 等害地獄	罪人は一緒に集るして其の首を梟し、尋いでまた還り活きる。	③ 堆壓	二つの大石山が罪人を推壓して骨肉を砕く。
㉔ 涕哭地獄	罪人の善體斷滅して、毛髮の遺余なく、惱みを受けること限りなく称怨喚呼の聲絶えず。	④ 叫喚	大鑊中に入れ熱湯涌沸して罪人を煮る。號叫喚苦痛辛酸萬毒並び至も餘罪未だ畢らざるが故に死せざらしむ。故に叫喚地獄と名付ける。
㉕ 大涕哭地獄	涕哭地獄と大同小異。	⑤ 大叫喚	叫喚と大同小異。
㉖ 阿鼻地獄	父母を殺害し、仏の偷婆を破り、衆僧と鬪亂し、邪を習い、倒見にして邪見と共に相應し、一切療治すべからず。	⑥ 燒炙	罪人を火の燃る鐵城中に入れ熱炙し皮肉焦爛す。
㉗ 炎地獄	形体より烟出て、皆融爛す	⑦ 大燒炙	燒炙と大同小異。
㉘ 大炎地獄	罪人此の獄中に在るも都て罪人の遺余を見ず。	⑧ 無間	罪人は皮を剥かれ熱鐵地を走らせられたり、大火の起る大鐵城を走らせられたりするなど罪人彈指の頃も苦ならざる時なし。

まず、兩者において相關性がある項目からいうと、名前が同じ㉒と②はその「黒繩」を使われる責苦の發想がまったく同じで、㉑と①は責苦の内容は違うものの衆生が「活く」と想い蘇る点では似通うことが見受けられる。さらに㉔㉕と④⑤は責苦による絶叫から發想された点で同じであり、㉗㉘と⑥⑦は業火によって体が焦爛してしまう点で同じである。一方、まったく相關性が認められないのは『増一阿含經』においては㉓等害地獄と㉖阿鼻地獄であり、『長阿含經』においては③堆壓と⑧無間である。総合的にいうと、『長阿含經』の方が内容的な面で『増一阿含經』より具体的且つ合理的であり、①③を除いてすべて熱地獄として設定されている点で『増一阿含經』より熱地獄としての性格を表面化する方向へと進んだといえよう。

つづいて、十六地獄に関する記述であるが、黒沙、沸屎、五百丁、飢、渴、一銅釜、多銅釜、石磨、膿血、量火、灰河、鐵丸、鉞斧、豺狼、劍樹、寒冰などの名前は『増一阿含經』「八難品」に挙げられている優鉢地獄、鉢頭地獄、拘牟頭地獄、分陀利地獄、未曾有地獄、永無地獄、愚惑地獄、縮聚地獄

21) 石川海淨譯(1978)『國譯一切經一』、大東出版社、p.413

、刀山地獄、湯火地獄、火山地獄、灰河地獄、荊棘地獄、沸屎地獄、劍樹地獄、熱鐵丸地獄とはその名称を異にしている。名はあるが實を伴わない「八難品」に比べて各小地獄の固有の性格を有している。注目すべき点は内容的に寒地獄に属する優鉢地獄、鉢頭地獄、拘牟頭地獄、分陀利地獄などがなくなり、最後の「五百丁」「寒冰」「豺狼」「劍樹」などを除いてすべて熱地獄として描かれることである²²⁾。八大地獄と平行して小地獄においても熱地獄としての性格が徹底されつつあることが分かる。

さて、大地獄と小地獄の関係についてであるが、前述したように『増一阿含經』『八難品』ではある特定の悪業によってある特定の大地獄なり小地獄なりに墮ちるとされ、小地獄に墮ちた罪人は悪業が盡きるまで一六個の小地獄を循環するようになる。悪業の種類に對する認識が強まるに従って大地獄と小地獄の個別性が目立ったわけであるが、ここではたとえば大地獄の相地獄から出た人が「悼惶として馳走し自ら救護を求む。宿罪の牽く所を覺らずして忽ち黑沙地獄に」入り、順次に小地獄を廻ることになる点が違う。八大地獄と十六小地獄の關連がより深まったといえよう。

さて、このように八大地獄と十六小地獄が確立する中で八寒地獄の方はどのような変貌をみせているのであろうか。この問いに答えるには同じく『長阿含經』『世紀經』の以下の十地獄の名とその由来を説く記述が大いに参考となる。

又彼二山中間復有十地獄。一名厚雲。二名無雲。三名呵呵。四名奈何。五名羊鳴。六名須乾提。七名優鉢羅。八名拘物頭。九名分陀利。十名鉢頭摩。(『新修大藏經第一卷』125下)

最初の「二山中間」は二大金剛山を指していて十地獄は八大地獄と同じ位置にあることになる。十地獄の名として厚雲、無雲、呵呵、奈何、羊鳴、須乾提、優鉢羅、拘物頭、分陀利、鉢頭摩などが擧げられているが、『増一阿含經』卷三六の「八難品」に十六地獄として取りあげられた優鉢地獄、鉢頭地獄、拘牟頭地獄、分陀利地獄の四つの地獄がこの十地獄に編入していることが分かる。以後、十地獄の名

22) 不覺忽到黑沙地獄。時。有熱風暴起。吹熱黑沙。來著其身。舉體盡黑。猶如黑雲。熱沙燒皮。盡肉徹骨。(…)不覺忽到沸屎地獄。其地獄中有沸屎鐵丸自然滿前。驅迫罪人使抱鐵丸。燒其身手。(…)到鐵釘地獄。到已。獄卒撲之令墮。偃熱鐵上。舒展其身。以釘釘手・釘足・釘心。周遍身體。盡五百釘。苦毒辛酸。號咷呻吟。(…)到飢餓地獄。獄卒來問。汝等來此。欲何所求。報言。我餓。獄卒即捉撲熱鐵上。舒展其身。以鐵鉤鉤口使開。以熱鐵丸著其口中。燋其脣舌。從咽至腹。(…)到渴地獄。獄卒問言。汝等來此。欲何所求。報言。我渴獄卒即捉撲熱鐵上。舒展其身。以熱鐵鉤鉤口使開。消銅灌口。燒其脣舌。從咽至腹。通徹下過。無不燋爛。(…)到一銅鑊地獄。獄卒怒目捉罪人足。倒投鑊。隨湯涌沸。上下迴旋。從底至口。從口至底。(…)不覺忽至多銅鑊地獄。多銅鑊地獄縱廣五百由旬。獄鬼怒目捉罪人足。倒投鑊。隨湯涌沸。上下迴旋。從底至口。從口至底。(…)不覺忽至石磨地獄。石磨地獄縱廣五百由旬。獄卒大怒。捉彼罪人撲熱石上。舒展手足。以大熱石壓其身上。迴轉揩磨。骨肉糜碎。膿血流出。(…)不覺忽至膿血地獄。膿血地獄縱廣五百由旬。其地獄中有自然膿血。熱沸涌出。罪人於中東西馳走。膿血沸熱湯。其身體手足頭面皆悉爛壞。(…)不覺忽至量火地獄。量火地獄縱廣五百由旬。其地獄中有大火聚。自然在前。其火焰熾。獄卒瞋怒馳迫罪人。手執鐵斗。使量火聚。彼量火時。燒其手足。遍諸身體。(…)不覺忽到灰河地獄。灰河地獄縱廣五百由旬。深五百由旬。灰湯涌沸。惡氣[火*逢][火*字]。(…)不覺忽至鐵丸地獄。鐵丸地獄縱廣五百由旬。罪人入已。有熱鐵丸自然在前。獄鬼驅捉。手足爛壞。舉身火然。(…)不覺忽至斫斧地獄。斫斧地獄縱廣五百由旬。彼入獄已獄卒瞋怒捉此罪人撲熱鐵上。以熱鐵斫斧破其手足・耳鼻・身體。(…)不覺忽至豺狼地獄。豺狼地獄縱廣五百由旬。罪人入已。有群豺狼競來[齒*盧]掣。[齒*齊]嚙拖。肉墮傷骨。膿血流出。(…)不覺忽至劍樹地獄。劍樹地獄縱廣五百由旬。罪人入彼劍樹林中。有大暴風起吹。劍樹葉墮其身上。著手手絕。著足足絕。身體頭面無不傷壞。有鐵嘴鳥立其頭上。啄其兩目。(…)不覺忽至寒冰地獄。寒冰地獄縱廣五百由旬。罪人入已。有大寒風來吹其身。舉體凍瘡。皮肉墮落。苦毒辛酸。悲號叫喚。然後命終。(『新修大藏經第一卷』122上-123中)

の由来を説く記述がつづくが、以下、『長阿含經』『世紀經』と原典を同じくすると思われる『長阿含經』『大樓炭經』卷二「泥犁品」の記述と比較してみる。

「世紀經」	名前の由来	「大樓炭經」	名前の由来	備考:『スッタニパーダ』 「コーカーリヤ」
㊦厚雲	其獄罪人自然生身。譬如厚雲。	①阿浮	自然生身。譬如雲氣。	アッパダ地獄
㊧無雲	其彼獄中受罪衆生。自然生身。猶如段肉。	②尼羅浮	尼羅浮泥犁中罪人身。譬如鹿獨肉。	ニラップタ地獄
㊨呵呵	苦痛切身。皆稱呵呵。	③阿呵不	甚酷甚痛大呼[口*弟]喚。	アハハ地獄
㊩奈何	苦痛酸切。無所歸依。皆稱奈何。	④阿波浮	甚酷甚痛大呼[口*弟]喚。	アババ地獄
㊪羊鳴	苦痛切身。欲舉聲語。舌不能轉。直如羊鳴。	⑤阿羅留	甚苦甚痛。欲喚呼不能但動舌。	アタタ地獄
㊫須乾提	其地獄中學獄皆黑。如須乾提華色。	⑥修提	身譬黃火。	白睡蓮地獄
㊬優鉢羅	其地獄中學獄皆青。如優鉢羅華。	⑦優鉢	身青譬如優鉢	青蓮地獄
㊭俱物頭	其地獄中學獄皆紅。如俱物頭華色。	⑧拘文	身色黃白。譬如拘文。	黃蓮地獄
㊮分陀利	其地獄中學獄皆白。如分陀利華色。	⑨分陀利	身色赤如分陀利。	白蓮地獄
㊯鉢頭摩	其地獄中學獄皆赤。如鉢頭摩華色。	⑩蓮華	身紅色。	紅蓮地獄

「世紀經」と「大樓炭經」との内容は若干の違いを除いてほぼ同じである。『スッタニパーダ』『コーカーリヤ』に見える十地獄を念頭に入れて、これを基準にしてみると「世紀經」は意譯、「大樓炭經」は音譯をする傾向があることが分かる。と同時に、前述したように「コーカーリヤ」の十地獄は最初からのものではなく、ニラップタ地獄、アッパダ地獄から増廣されたものであって、また『増一阿含經』『八難品』の十六地獄として取りあげられた優鉢地獄、鉢頭地獄、拘牟頭地獄、分陀利地獄が十地獄への編入を経てからのものであったことが推測される²³⁾。

とにかく、ここで八地獄に對立する十地獄(後の八寒地獄)が確立することになったが、鉢頭摩地獄が「鉢頭摩地獄中火焰熱熾盛」と説明されている点ではまだ寒地獄としての性格は徹底されていない。

さて、この十地獄は『雜阿含經』一二七八經になって以下のように八地獄となるのである。

佛告比丘。諦聽。善思。當爲汝說。譬如拘薩羅國。四斗爲一阿羅。四阿羅爲一獨籠那。十六獨籠那爲一閻摩那。十六閻摩那爲一摩尼。二十摩尼爲一佉梨。二十佉梨爲一倉。滿中芥子。若使有人百年百年取一芥子。如是乃至滿倉芥子都盡。阿浮陀地獄衆生壽命猶故不盡。如是二十阿浮陀地獄衆生壽等一尼羅浮陀地獄衆生壽。二十尼羅浮陀地獄衆生壽等一阿吒吒地獄衆生壽。二十阿吒吒地獄衆生壽等一阿波波地獄衆生壽。二十阿波波地獄衆生壽等一阿休休地獄衆生壽。二十阿休休地獄衆生壽等一優鉢羅地獄衆生壽。二十優鉢羅地獄衆生壽等一鉢曇摩地獄衆生壽。二十鉢曇摩地獄衆生壽等一摩訶鉢曇摩地獄衆生壽。比丘。彼瞿迦梨比丘命終墮摩訶鉢曇摩地獄中。(『新修大藏經第二卷』351下-352上)

例の『スッタニパーダ』『コーカーリヤ』の説話の中で地獄の壽命を説く所であってここでは十地獄が阿浮陀(Arbuda)、尼羅浮陀(Nirabuda)、阿吒吒(Atata)、阿波波(Hahava)、阿休休(Huhuva)、優鉢羅(Utpala)、鉢曇摩(Padma)、摩訶鉢曇摩(Mahapadma)の八地獄に整理された。阿浮陀は水泡の意、尼羅浮陀は水泡裂の意であり²⁴⁾、阿吒吒、阿波波、阿休休は苦痛のため發せられる絶叫に擬せたもの

23) 「世紀經」と「大樓炭經」兩經典共に地獄の壽命を述べるが、「Aの多數集まったものがBの一つに等しい」という表現様式を取る点で「コーカーリヤ」と一致しており、さらに「コーカーリヤ」の説話を載せている。この二書と「コーカーリヤ」の關連性を窺い知れよう。

24) (1979)『國譯一切經 三』、大東出版社、p.328

である。累述したように優鉢羅は青蓮華、鉢曇摩は紅蓮華を各々意味し、摩訶鉢曇摩の摩訶は大きいという意味である。結果的に十地獄の中で須乾提、俱物頭、分陀利が省かれることになったわけである。以後、この形は後の經典に八寒地獄としてほぼそのまま取入れられることになる。

4. おわりに

以上、八熱地獄、八寒地獄、十六小地獄といった地獄像が形成する過程をベータ文獻から四阿含經までを対象にして考察してみた。

まず、『リグ・ベータ』において死者の住處は天であるとする簡明な思想があってそのヤマの國は仏教に見られるような極苦の世界ではなく、むしろ楽しみに満ちた理想の樂土と考えられた。次の『アタルヴァ・ヴェーダ』になると、天國に對置される場所としての地獄が徐々にかたちを示すようになり、『アタルヴァ・ヴェーダ』以後、時代が降り後期のヴェーダ文獻になると、ヤマは人間の善惡の行爲を判定するものとなり、死後の審判者という地位を与えられる。その一つの頂点として『マハーバーラタ』があって、ヤマは死者の國にあって死者を裁き、罪人は恐ろしい暗黒の世界でさまざまな責め苦を受けるとされる。このような地獄の諸相は、西曆前二世紀ごろに成立したとされる『マヌの法典』『ヤージュニヤ・ヴァルキヤ法典』などになると、顕著な特色がそこに目立ってくる。それは、多彩多様な地獄の分化、地獄名の頻出であって二一の地獄に整理されてくる。

仏教に受容されたヤマは、一つは天に昇って、夜摩天(焰摩天)となった。欲界の第三天で、輝く光に満ち溢れて晝夜の別がなく、不思議な歡樂の世界とされる。いま一つは地にもぐって閻魔王となり、地獄の主催者とされた。初期の經典が説くところでは、閻魔王の支配する地獄そのものの記述は、かなり単純なものともみていい。たとえば『ダンマ・パダ』や『ウダーナアルガ(感興のことば)』などには悪い行いをした人は地獄(悪い所、閻魔王の世界)に墮ちると説かれるが、どのような責め苦を受けるのか、地獄はどこにあるのかなどについては触れない。一方、『スッタニパーダ』における地獄関連記述は上記の二書よりもっと具体的であって、特に「コーカーリヤ」には十地獄の名前と壽命、惡業、責苦について詳しい。責苦は後の時代にごく典型的な責苦として登場している点が注目されるが、十地獄関連記述には成立年代が疑問があること、さまざまな惡業は説かれているにも関わらず以上の「コーカーリヤ」を除くと地獄と関連づけて説いている記述は幾つかを数えるにすぎないこと、散文の具大的な名前が登場しているにも関わらず後の地獄の責苦がどの地獄に屬するかを説明していない点も合わせて、まだ、地獄の思想は組織化されていないのである。

次は四阿含に關してである。『中阿含經』『天使經』には地獄の位置について深さが無量由延にして地底にあるといい、具体的な記述ではないものの「地底」と明記して注目される。また四門大地獄から抜け出た罪人は峰巖地獄、糞屎地獄、鐵鏢林地獄、鐵劍樹林地獄、灰河に生じて責苦をうけるとされ、後の十六小地獄と關連して注目される。

「天使經」を敷衍・潤色したとしい『増一阿含經』『善聚品』には「天使經」においての地獄の位置

がそっくり省かれていて、この段階では地獄の位置は地底であるとの認識が当たり前であると考えられたようである。また「天使経」に比べて大地獄に付属している小地獄があると明記されており、その小地獄は十六個であるという。しかし、十六の地獄の名前の中、六つの地獄の名前しか見えず、各地獄の責苦に関する記述も最初の熱灰地獄から沸屎地獄までだけになっている。他に「天使経」の場合、各地獄を単純に一回りするのに対して、ここではまず熱灰地獄から沸屎地獄まで廻って熱屎地獄を軸に二種類の循環の経路を辿っている点は注目される。

『増一阿含経』『善聚品』では未完のまま終わった十六の小地獄の名前が見えるのは同じ『増一阿含経』『八難品』においてである。と同時に大地獄が八大地獄に拡大されている点も見逃せない。しかし、小地獄での責苦に関する記述は幾つかの地獄にだけ限定されており、八大地獄と十六の小地獄の区別が明確になったといえるが、十六小地獄に関する概念はまだ定着していないといえよう。他に「天使経」と違う点は各地獄ごとに十六個の小地獄が付属していると明記されている点、ある特定の悪業によってある特定の地獄に墮ちるとされる点などが挙げられる。

一方、『佛説長阿含経』『世紀経地獄品第四』には金剛山(鐵圍山)の間に地獄が位置していると説く。地獄が地底にあるという垂直的な視点だけではなく、水平的な視点が持ち込まれるようになったわけである(『増一阿含経』『七日品』も同様)。この経には八大地獄の名が取り上げられているが、名前だけを見るかぎり『増一阿含経』『八難品』のそれとは異同があって注目される。名前の由来を見ると、「世紀経地獄品第四」の方が内容的な面で「八難品」より具体的且つ合理的であり、熱地獄としての性格を表面化する方向へと進んだといえよう。十六地獄に関する記述においても名はあるが實を伴わない「八難品」に比べて各小地獄の固有の性格を有しており、寒地獄に属する優鉢地獄、鉢頭地獄、拘牟頭地獄、分陀利地獄などがなくなるなど小地獄においても熱地獄としての性格が徹底されつつあることが分かる。他に、大地獄と小地獄の関係についてであるが、ここでは一つの大地獄のから出た人が順次にその付属の小地獄を廻るとされる。

さて、最後に八寒地獄についてであるが、『長阿含経』『世紀経』とこの経とと原典を同じくすると思われる『長阿含経』『大樓炭経泥犁品』には十地獄の名がみえており、『スッタニパーダ』『コーカーリヤ』の十地獄との関連性が確認される。『増一阿含経』『八難品』に十六地獄として取りあげられた優鉢地獄、鉢頭地獄、拘牟頭地獄、分陀利地獄の四つの地獄がここに編入して十地獄の形になったと推測される。この十地獄は『雑阿含経』一二七八経になって八地獄と整理され、後の経典に八寒地獄としてほぼそのまま取入れられることになる。

【参考文献】

- ・石田瑞麿(1985)『地獄』、法藏館
- ・岩本裕(1965)『極樂と地獄』、三一書房
- ・金岡秀友(1988)『地獄・極樂思想の系譜』、『地獄と極樂』、集英社、pp.23-25
- ・定方晟(1980)『仏教にみる世界観』、第三文明社、p.108
- ・辻直四朗譯(1972)『リグ・ヴェーダ讃歌』、岩波書店、pp.230-231
- ・中村元譯(1978)『ブッダの眞理のことは感興のことは』、岩波書店
- ・中村元(1985)『ブッダのことは』、岩波書店、p.145
- ・林五邦譯(1978)『國譯一切經 九・十』、大東出版社、p. 9
- ・水野弘元(1983)『仏典解題事典』、春秋社、P.66
- ・(1979)『國譯一切經 三』、大東出版社、p.328
- ・(1978)『國譯一切經一』、大東出版社、p.413
- ・(1924)『新修大藏經第一卷』、大正一切經刊行會
- ・(1924)『新修大藏經第二卷』、大正一切經刊行會

要 旨

一般的に地獄は八熱地獄、八寒地獄、十六小地獄と認識されている。本稿の目的はベータ文獻から四阿含經までにみる地獄、特にその位置や構造、種類などを究明することにある。『リグ・ヴェーダ』においてのヤマの國は極苦の世界ではなく、むしろ楽しみに満ちた理想の樂土と考えられた。次の『アタルヴァ・ヴェーダ』になると、天國に對置される場所としての地獄が徐々にかたちを示すようになり、『アタルヴァ・ヴェーダ』以後、時代が降り後期のヴェーダ文獻になると、ヤマは人間の善惡の行爲を判定するものとなり、死後の審判者という地位を与えられる。その一つの頂点として『マハーバーラタ』があって、ヤマは死者の國にあって死者を裁き、罪人は恐ろしい暗黒の世界でさまざまな責め苦を受けるとされる。このような地獄の諸相は、『マヌの法典』『ヤージュニヤ・ヴァルキヤ法典』などになると、多彩多様な地獄の分化、地獄名の頻出の傾向が見え、二一の地獄に整理されてくる。仏教に受容されたヤマは、一つは天に昇って、夜摩天(焰摩天)となった。初期の經典が説くところでは、閻魔王の支配する地獄そのものの記述は、かなり單純なものとみている。以後、四阿含の中の『中阿含經』『天使經』には地獄を「地底」とする記述が見え、四門大地獄と後の十六小地獄と關連する小地獄に關する記述が注目される。「天使經」を敷衍・潤色したと思しい『増一阿含經』『善聚品』には十六個の小地獄が紹介されるが、具体的に六つの地獄の名前しか見えない。十六の小地獄の名前が全部見えるのは同じ『増一阿含經』『八難品』においてであるがこれまた各小地獄が固有の性格を有してはいない。と同時に大地獄が八大地獄に擴大されている点も見逃せないだろう。一方、『佛說長阿含經』『世紀經地獄品第四』や『増一阿含經』『七日品』には地獄が地底にあるという垂直的な視点だけではなく、水平的な視点が持ち込まれるようになった。また『世紀經地獄品第四』の方が内容的な面で「八難品」より具体的且つ合理的であり、熱地獄としての性格を表面化する方向へと進み、小地獄においても熱地獄としての性格が徹底されつつあることが分かる。最後に八寒地獄についてであるが、『長阿含經』『世紀經』とこの經と原典を同じくすると思われる『長阿含經』『大樓炭經泥犁品』には十地獄の名がみえており、この十地獄は『雜阿含經』一二七八經になって八地獄と整理され、後の經典に八寒地獄としてほぼそのまま取入れられることになる。

キーワード：説話、地獄、八大地獄、八寒地獄、小地獄、閻魔王

투 고 : 2004. 5. 31
1차 심사: 2004. 6. 12
2차 심사: 2004. 7. 3

住 所 : 156-743 서울특별시 동작구 상도5동 1-1 숭실대학교 일본학과
電 話 : (연구실) 02-820-0534 (H.P) 011-9733-9933
E-mail : silee@ssu.ac.kr